

修理・修繕 よみがえるものの命

う さ み な お は ち
宇佐美 直八



寒糊 大寒に仕込まれた糊

今からおおよそ 240 年前、天明年間に西本願寺前で創業を開始された表具屋「宇佐美松鶴堂」。戦後制定された文化財保護法の下、西本願寺の襖絵・障壁画の修理をはじめ、建仁寺の風神雷神図屏風や厳島神社の平家納経など、修復された国宝・重要文化財の数は 1 万弱に上ります。現在、襲名 9 代目宇佐美直八が次世代 10 代目とともに、修理に取り組まれています。今回の巻頭インタビューでは、9 代目に、専門的な修理の解説よりも、主に「修理すること」と「修理されたもの」についてお話をうかがいました。そこからみてきたのは、人のごとく「もの」と接し、長い時間軸で「もの」とともに自然に生きておられる姿です。

インタビューー やまかわ はじめ
山川 肇
京都府立大学大学院 生命環境科学研究科

文責 かじ みゆき
鍛冶 美行
編集部

表具屋と修復

まず表具屋というのは、和紙や絹に描かれた書画を掛け軸や巻物・額・襖・屏風・障壁画など、それぞれの目的に応じて仕立てる職業です。掛け軸に仕立てる場合は、絵や書が書かれた本紙の裏側から裏打ち紙（美濃紙、美栖紙）を順に貼ります。その周囲に取りつける裂地とよばれる織物にも同様に、裏側から裏打ち紙を貼ります。本紙と裂地が同じ厚みや柔らかさになるように調整しながら裏打ちを行い、乾燥期間を経て本紙の周りにも裂地を取りつけます。その後、総裏打ちといっ

て、裏側全体に上巻絹と裏打ち紙（宇陀紙）を貼って乾燥させ、最後に上下に軸木や紐を取りつけます。また、屏風や襖ですと、組子になった木の骨組みに、何重にも重ねて貼ります。下張りだけで 6 工程あり、片面で 9 層程度の和紙を下張りした上に 1～2 回裏打ちをした本紙を張り上げます。表裏合わせると 20 枚程の和紙が重なっています。その和紙の重なりが、空気を含むことから断熱や調湿効果もあり、触ったときに柔らかな感触があります。このように手をかけて仕立てた物を、何十年、何百年を経て、再び修理するこ



「宇佐美松鶴堂」の方針は、四輪駆動に喩えて、後輪は伝統的な技術バックボーンをしっかりと持ちつつ、前輪は時代時代に応じて、新しい空間に合わせてハンドルを切っているというです。

とも大切な仕事です。戦後「文化財保護法」ができて、文化庁が本格的に文化財の修理をすることになり、補助金を出すようになりました。そこで、襖、紙あるいは障子を張り替えたりしていた「表具屋」が、行政指導の下、使用材料などの打ち合わせもして文化財も「修理・修復」してきたわけです。

修理の時間

一つの修理に要する時間は、屏風・掛け軸・襖・巻物と、さまざまな対象物により、さらにその傷み具合にもより、一概には言えませんが、一般の仏画の掛け軸でしたら、6～10 か月ばかりかかります。一番長く修理にかかったもので、25 年というのがあります。福岡県の宗像大社という神社に重要文化財の一筆

一切経というお経があります。色定法師というお坊さんが一生をかけて書かれたお経ですが、それが完遂になった巻物として約 3,600 巻あるのです。それが重要文化財なので、文化庁の指導で修理することになり、約 3,600 巻を、4 業者がチームを組み、私の祖父の時代から始めて、私の時代で終わったので、それに 25 年かかったわけです。もし 1 業者でやっていたら、100 年かかる計算ですね（笑）。新聞には「3 代にわたっての大修理」という見出しで出ました。襖絵に関しては、二条城もそうです。いつ終わるかわからない、エンドレスの仕事です（笑）。世代を超える、息の長い仕事なんです。次の世代にバトンを渡す、ゴールのない駅伝みたいなものです。

修理にあたって

描き起こしはしません。例えば、掛け軸を例に挙げると、1 箇所穴が開いて絵が欠けてしまっているとすると、欠けているところはそのままにして、穴が開いているところを裏から和紙で繕います。欠けたところは、「ほな、どうするんや」と思われるでしょうが、われわれの考えでは、欠けたままにしておいてよしです。繕いをしたところに、同じように線を引き色を塗ると、見た目はきれいになってるように見えますが、この作品に手を加えたことになって、描き起こしをしたことになってしまふ。それは、してはいけないことなんです。今の文化庁の指導の下、オリジナルのものには描き加えないという



写真1：逆算年表

2025（令和 7）年をゼロにして、平成、昭和が続き、昭和の下にある「99」が、今から 99 年前となります。大正元年は 113 年前、明治元年は、今から 157 年前です。時間のスパンは逆算年表に象徴されるように、時間の逆戻しで、後ろから勘定します。「何年前やろか」と、振り返って考えることができます。これがあると、イメージが湧きやすく、感覚的にどの時代に作られたものかが捉えやすくなります。

のが定説になっています。ただ、仏像や彫刻は違うんです。例えば阿弥陀如来像の指がなくなっているとすると、本体と同じような素材で復元し、付け加えられたりします。

修復後の作品で色が鮮やかになる、あるいは、ちょっとしか見えなかった模様ももっときれいに見えるのは、見え方が変わったからです。長い間吊られていた掛け軸は、表面に埃や汚れが自然と付いているわけです。修理の際に、養生紙を敷いた作業台の上に吸い取り紙を敷いて、本紙を裏向け、少し水気を与えて、裏から裏打ちするなど、作業をしている間に、その吸い取り紙に表面に付いていた汚れや埃が全部付いてくれます。ですから、修理前のちょっと薄汚れた表面と、吸い取り紙に汚れや芥が付いてくれた後のものを比べると、非常に鮮やかに見えるんです。それまでは、オブラートがかかっているような感じだったのが元の色や線がはっきり見える。でも、それは全然手を加えていないんです。自然と汚れが落ちてくれるわけなんですよ。

修理の手法

修復には本格修理と応急修理の2通りがあります。人間の体のように、重病であれば手術をするけれど、かすり傷程度であれば、消毒だけしてバンドエイドを貼っておくだけの処置と同じです。依頼主から相談を受けたときには、本格修理というのは非常に費用もかかり、そこまで費用をかけてするほどでもない場合は応急修理のほうがいいのか、その辺はわれわれ専門家の判断で返事をするんです。よく、われわれの修理の業界を医療の世界に喩えるんですが、お医者さんに行くと、問診して、診察してカルテをつくられる。われわれも作品に対し、修理カルテを作ります。その作品のいろんな情報をそこに入れていくわけなんです。寸法や傷み具合、巻物か、掛け軸か、修理に使う材料、裏打ち紙の質や、何枚貼ってあったかどうかなどの状態から、どうやって修理したかを修理のたびにメモとして書き込んでいく。修理が終わって納品するときには修理報告書として、修理の前・後の写真、修理工程の写真も入れて、克明に書いてお渡しする。そ

うしておく、50年先とか次の修理の時期が来たときに、この報告書をみれば、前回の修理材や修理部分、修理方法がわかるからです。修理のプロセスでは、光学機械はよく使います。高度医療のごとく、状態を調べるのに実体顕微鏡を使い、不随しているデジタルカメラで撮影して、残していくんです。

修理するときに特に注意をしているのは、やはり、外科手術と同じで、失敗は許されない。掛け軸の真ん中の本紙や襖絵の本紙が一番大事なものです。その本紙に近づく工程になるほど、気を遣います。過去の作品に傷を付けてはだめですから。

修理の材料－寒糊（かんのり）

材料は修理の要です。天然素材で上質の和紙、^{にかわ}膠、糊が必要になります。糊は弊社で作りますが、その材料は小麦粉の澱粉です。それに井戸水を入れて攪拌して、1時間ほど炊くわけなんです。小麦粉澱粉糊という名前があり、^{じんりのり}沈糊ともいいます。日常で使うのは、この新糊ともいうもので、炊いてから一昼夜瓶に入れておき、温度が冷めたら使います。大体3日間くらいで、その瓶に入れた糊はな

くなるので、1週間のうち2回くらいは糊炊きをします。この新糊とは別で、古糊ふるというものがあります。1月の一番寒いといわれている大寒に、炊いた糊を大きな瓶に入れて仕込んで、約10年の間保存する。だから古糊というのですが、大寒の時に炊くので、これを、寒糊かんりともいいます。ですから今使っている古糊は約10年前に炊いた糊です（トップ写真・写真2）。大寒のときに炊く理由は、一番寒いときは、井戸水に雑菌が少ないといわれているんです。本当に雑菌が少ないのかどうかは、調べたことがないのではっきりとはわからないんですが（笑）。——そういうもんなんや——と思いながらやっています。この糊は何に使うかというと、巻物とか掛け軸などの裏打ちの糊に使います。この糊を使うと、とても柔らかく仕上がるんです。掛け軸を掛けたときに、するするするっと、柔らかく掛かってくれて、巻くときも柔らかく巻ける。これを使わないと、ごわごわした感触の掛け軸になるんです。10年間寝かすことによって、その接着力が弱くなるんですね。弱くなる分、裏打ちするときに、とんとんとんとんと打ち刷毛で叩いて、接着力を強化する作業をするんで



写真2：寒糊

糊を製作した人の名前と、その日付が瓶の横に書かれ、その後毎年手入れをしながら、約 10 年地下室で保存して仕込まれます。

す。これをする事によって、50年先、80年先の修理をする時期が来たときに、裏から少し水気を与えてやると、負担なく、裏打ち紙がめくってくれるんです。私后感心するのは、それを先人の方がよく考えたなど。それが脈々と伝えられているわけで、よく10年も寝かすのは大変でしょうと驚かれますが、大寒が来たら糊を炊く、というのが生活の一部として、1年の流れの中でやっているの、毎年10年前の糊を使っているだけの話なんです。

修理を終えて、次に逢うときを想う

修理を終えて作品を納品するとき、「次の修理のときが来るまで頑張ってや」という想いはありますね。仏画や掛け軸の本紙に阿弥陀如来の姿が描かれているものは、お寺さんではご本尊といわれ一番大事な掛け軸ですが、そういうものもよく修理に預かります。たとえば、1年間預かったとすると、その1年間は本堂内はお留守になるわけです。いよいよもって、納品することになった日、そのお寺の檀家さんが集まって、阿弥陀さんを待っておられ、迎えはる

わけです。保存箱に入れて持って行って、しずしずと納品をすると、「宇佐美さん、それ掛けてください」と。本堂の真ん中に掛けるのを、周りの檀家さんが固唾をのんでじっと見ておられる。するすると掛け軸を下ろすと、よくぞ帰ってくれましたと、特にご年配の方々は涙を流しながら手を合わされるんです。一つは信仰心ではあるでしょうが、やはりお年をいった方は、ものを大事にされるというのがあるんです。うちの父も母もそうでしたが、戦争で物資のない時代、食料品も十分にない時代を経験されておられるので、ちょっとしたことでもありがたいと感謝される、そういう気持ちをお持ちの方たちは、ものを大事にされるのだと思います。改めてそれだけ大事なものを預かっているのだと感じます。たとえそれが国宝や重要文化財ではなくても、そういう気持ちも伝えていきたいと思います。

保存と管理

依頼主から、色々な相談を受けるので、その保存・管理のアドバイスはし

海外に日本の美術品が大量に流れており、ボストン美術館や大英博物館に所蔵されている日本の美術品の修理・修繕に、日本の伝統的な技術が必要となります。以前は海外から美術品をわざわざ日本に運び、われわれが修理して、元の美術館に送り戻す「里帰り修理」をしていました。弊社は祖父の時代から、海外から希望する技術者を受け入れ、技術を伝授し、帰国後、その国の博物館で修理をしてもらうようにしていました。弊社で研修を終えた外国人修理技術者は、60名くらいはいます。今や、里帰り修理はほとんどなくなり、それぞれの国で、修理の技術を会得した技術者が修理しています。そういう意味では、日本の伝統的技術で国際交流をしているともいえます。

ています。「もの」というのは、紫外線が当たる、あるいは温度湿度の環境で、人間の体と同じように、必ず朽ちていくものです。しかし、できるだけ、その朽ちていくスピードを遅くするために工夫されたものもあるんです。掛け軸を桐の箱に入れて保存するというのも、裸のまま置いておくよりは一つの養生になります。虫の害から守れるし、温度や湿度からも守れます。また、こういう太巻き芯という桐材でつくられますが、その下軸が細ければ細いほど、細巻きになって本紙に負担を与えるわけです。ですから、考えられたのは、太めに巻いて行くと、それだけアール(半径)が大きくなるので負担がかからない。巻状のものというのは、どうしても「折れ」ができてしまう宿命的なことがあるので、下軸のサイズをきっちりと囲

う太巻き芯を使って緩和してやる。修理とともに保存・管理は大事です。人も健康を維持するにはどうしておけばいいのかということと同じです。

私の文化財、あなたの文化財

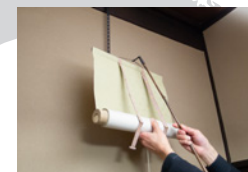
国が定めた重要文化財は歴史的な価値のあるものですが、指定されていない、それぞれ皆さんの家々に残ってきた大事なものは、その家の歴史であり、愛着があるのではありませんか。仕事とはまた別で、私が会長をしている「文友会」という会では、年に2回、ご家庭、身の回りの文化財のために、「文化財ドック」というイベントを開催しています。この行事をするようになったのは、例えば大きなお寺の本堂を修復する場合、多くの業種の方々が集まるわけなんです。畳屋、総合建築、瓦屋など、これだけたくさんの専門業者がいるので、一緒にその技術を活かすことを考え、



太巻き芯



太巻き芯に掛け軸を
巻き上げていく



掛け軸を下ろす



巻き上げた掛け軸(太巻き芯)の側面



巻き上げた掛け軸

写真3：太巻き芯に沿わした掛け軸

「あなたの大切な文化財を診察します」という趣旨の元、立ち上げたわけです。今年で第30回目を迎えます。通常、京都で年2回開催するのですが、第30回目にあたり、大阪万博があることから大阪することになったんです。わが家に伝わる家宝や、各寺社仏閣の大切な資料など。持ってこれないものは写真を撮ってこられます。相談を受けてから、その場所に行くこともあります。

第1回文化財ドックは、京都の建仁寺の塔頭を借りて（公財）京都古文化保存協会と文友会の共催で行いました。最初は相談コーナーだけでしたが、皆さんにもわかりやすいようにと、2回目からは展示コーナーを加えました。われわれが使っている道具や材料を展示して、こんな作業をしていますというのを説明したんです。その後、いや、まだ物足りない、もう一つ付け加えようということになって、将来、こういった仕事を担ってくれる若い人たちに体験してもらおうということで、体験コーナーを設置しました。体験コーナーでは、大きな木をカンナで削るとか、あるいは粘土のような素材で瓦を造る、あるいは、飾り金具のコーナーでは、昔ながらの材料の金属の板をこんこんこんと専用の道具を使って、コースターを作ってもらいます。ですから、今は相談コーナー・展示コーナー・体験コーナーの3本の柱で開催しているんです。

家族連れで来られる方も多く、カンナ削りとか、われわれの子どもの頃は、家に大工さんが来られていたから知っています、今の子どもは見たことが

ないんですよ。大人は、ものを大切にという、ものとの気持ちのつながりを思い出すというんですか、参加者は思い思いに楽しまれているようにみえます。URL : <https://www.kobunka.com/news/post-190/>

和紙の漉きなおし —和紙の水平リサイクル

ものを大事に使うという話から、和紙についても説明させてください。われわれ、和紙をよく使います。全国、九州から北海道まできれいな水の流れている川のところで和紙は漉かれますが、文化財修復に使う紙というのは、ある程度限られているんです。われわれの作業で、和紙を裁断したり、裏打ちして要らないところを切ったりすると、端が残ってしまうんですが、これを捨てずに全部残し、ある程度たまったら、和紙を漉かれているところへ持って行って、碎いてもらって、また再生する「漉きなおし」をしてもらいます。せっかく、手間暇かけて漉いてくれた紙を切ったあと捨てるやなんて、もったいないでしょう。ですから、全部こうやって置いておくんです（写真4）。これには、一つに、大学を卒業したとき、過去に弊社で修理技術を学んだイギリス人OBの働いている大英博物館を訪れた際に、「宇佐美さん、この紙ね、あなたのおじいちゃんからもらった紙なんだ」と言うて、ほんとに小さい紙でしたけど、大事に使ったはったのを見て、衝撃を受けたんです。なかなか手に入りにくいんやと思います。せやけど、



宇佐美談「紙漉きは、寒い時期に、寒いところで、水の中に和紙の繊維、雁皮や楮とかを入れて漉きとって和紙にしていって作業です。一枚漉いては確かめ、厚みを均等に漉いていく作業は、難しい技術が要ります。その漉いてはる姿を見るたびに、大事に使わなあかんと思うんです」

写真4：裁断後の残った紙は水平リサイクルへ

普通やったら捨ててしまうようなところ、そうやって、こんなメモ用紙くらいの紙でも大事に使ってくれたはった。一方で、簡単に捨てはる人もいはるのに、一方ではあんなに大事にして使ってくれたはる、その想いがね、われわれももたないことしてるんとかやうかなとか、自省することが多いんですよ。できる限り、捨てないでおきたいんです。

日々の暮らしの中で

文化財の修理とか修復と聞くと、ステージの違った別世界の話と、身近に感じられないかもしれません。でも、大切にしようと思ったときに出てくる発想というのは、どこか共通するものがあるのでは

ないでしょうか。今、日本の生活から修理というものが失われているような中で、修理する技術はまだ残っています。これは文化財の修理に限っての話ではないと思います。確かに、今は使い捨てのものがあふれていて、安価でいろんなものが買える。修理するより新しく買い換えたほうが安いときも多い。ものは、どうしても自然に壊れていきますが、人は、ものを大切に使い、壊れたとしても修理することもできます。修理して長く持ち続ける、愛着をもって大事に使うという、そういう「もの」との関係は次の世代の子どもに託していく、それくらいの長い気持ちをもってもらえればありがたいと思います。



9代目 宇佐美 直八 PROFILE

1958年8月11日 京都市生まれ。大学卒業後、(株)宇佐美松鶴堂に入社。文化財修復技術を習得しながら、先代の下で育った技術者が従事している大英博物館やボストン美術館等、各国の美術館や博物館を視察して回る。主な仕事は、京都迎賓館表具工事、東西本願寺の阿弥陀堂および御影堂障壁画修理、国宝および重要文化財の襖絵や掛軸、厳島神社の平家納経等の古文書類の修復などの傍ら、現代アート作家などのモダンアート作品を掛け軸や屏風に仕立てる仕事も請け負う。また、文友会（公財）京都古文化保存協会とともに、文友会会長として、文化財ドックを開催し、寺社仏閣や個人の宝物の保存や修理の相談も受けている。